「神の家族」　　２０２２年7月24日

エフェソの信徒への手紙２：１１～２２

佐々木　佐余子

エフェソの町は多くはギリシャ人が住んでおり、ユダヤ人も少数ですが暮らしていました。パウロは、11節で「だから、心に留めておきなさい。あなたがたは以前には肉によれば異邦人であり、いわゆる手による割礼を身に受けている人々からは、割礼のない者と呼ばれていました」とあるように、あなたがたとは、ギリシャ人を指しており、手による割礼を身に受けている者、とありますが、この人たちはユダヤ人を指しているのです。そして、１２節を読むと、「また、そのころは、キリストとかかわりなく、イスラエルの民に属せず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きてきました」と言っています。ギリシャ人がそうだったように、多くの日本人も当てはまるかも知れません。１３節が嬉しい言葉です。「しかし、あなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです」と言っています。元来はユダヤ人と異邦人は相いれない民族だったけれど両者が、イエス・キリストを信じることによってお互い近い者になったと言っているのです。こういうことはありそうですね。今、世界は狭くなっているから外国の人たちでも、教会に行っている者同士、共通の結びつきがあるのではないでしょうか。昔、説教で呼ばれて、所沢みくに教会に行った時のこと、礼拝に外国人がおられたのです。礼拝後、後ろの席に座っていたら、その外国人がニコニコしながら寄ってくるのです。その方はアフリカ系の男の方でとても大きな人でした。初対面の方です。旧知の友達のように挨拶されて、もうびっくりしました。女性牧師が珍しかったのでしょうか。ニコニコするのです。その他何人か外国人がおられましたね。民族は違うけれど、主イエス・キリストにおいて近い者となったのです。そして、１４節からが大事な御言葉です。「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、」とあります。ここに隔ての壁とありますが、パウロの念頭にあるのは何でしょうか。パウロはおそらく神殿の石垣を考えたのではないでしょうか。ヘロデ大王が神殿を再建したのですが、その神殿の中にはユダヤ人が入れる庭と、異邦人が入れる庭があって石垣で分け隔てられており、これを無視して超えるものは死の罰があるのです。主イエス・キリストはこの隔ての中垣を取り除かれたのでした。そして、１５節に「規則と戒律ずくめの律法を廃棄されました」とあるように、主イエス・キリストはたくさんの律法を二つにまとめられたのです。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」「隣人を自分のように愛しなさい」と、律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている、と教えられました。とても分かりやすくて良いとは思いますが、二つ目の戒めが難しいです。人間は感情の動物ですので、たとえキリスト者同士であっても、軋轢を生む場合もあるでしょう。そこをどのように対処していくか、その人の人間性が問われます。パウロはどのように考えているのでしょうか。１６節をご覧く

ださい。「十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました」とあります。そうですね。これしかないのです。１７節「キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました」と語っています。主イエス・キリストは復活され聖霊によって自由に私たちのところに来られています。今、ここにもお出でになってくださるのです。目には見えないけれども。ですから、遠く離れている人にも、近くにいる人にも平和の福音を告げ知らせてくださるのです。１８節「それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことが出来るのです」と語っています。パウロもきっとこのような経験があったと思います。牧師も信徒さんも同様ではないでしょうか。教会生活には様々なことがあります。人間生きていくに、細胞分裂を繰り返して進化していくと思います。牧師は教会を変わりますから、張った根を引き離してよそに変わるのです。残った根は大変です。悲鳴をあげるでしょう。でもここのように数人の先生方が見えられて、代務者も与えられ主日礼拝を休むことなく続けられたから良かったです。そのようにスムーズに運べばいいけれども、中には出来ないところもあります。そこで、人間ですからいろいろな感情がおこり、もつれ混乱するのです。敵意が生まれるかも知れません。でも最終的には主イエス・キリストに依り頼む他はないのです。神が手当てをしてくださいます。その時お互いの信頼が回復し元に戻り再生するのです。

エフェソの町は海沿いにあるので市場がありました。その近くの廃墟から一つの碑文が発見されたのです。その碑文は教会の伝道が盛んになったことを証明するものでした。碑文とは、石碑に彫った文のことです。その碑文は長方形の石に刻まれていました。元々は女神アルテミスの像を安置する土台だったのです。あるクリスチャンがアルテミスの女神の代わりに十字架を建てたのです。その碑文にはこのように刻まれていました。「神は女神アルテミスの虚偽の像を取り除き、その場所にすべての偶像を放逐するしるしである十字架を建てた。それは神を称え、また、勝利に満ちた不朽のキリストの象徴を称えるためである」と刻まれているそうです。パウロの伝道の後、エフェソの町の近辺には、キリストの教会が７か所も建てられました。そして後、パウロの弟子テモテが監督になりました。このエフェソはイエスさまの母マリアが、ここで帰天して葬られたという伝説の故に、小アジアの幾つかの教会の中心となり、キリスト者が巡礼を行う聖地となりました。

19 節以下でパウロは大事なことを言っています。「従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、」と言っているように、わたしたちは神の家族なのです。肉によらず、霊に結ばれた家族なのです。肉の家族は血がつながっていますが、それぞれ家庭を持ち、別の世界に入ります。けれども霊の家族は、毎週ここで会って礼拝します。「遠くの親戚より、近くの隣人」といいます。天の神を父と呼び、わたしたちは子どもです。神の家族というと、おこがましい感じがしないでもないですが、

おこがましいとは、身の程知らずに思い上がることを言いますが、あの天の神さまと家族なんて申し訳ないと思います。けれど、パウロはそういう意味で言ったのではなく、主イエス・キリストを中心にして、信仰でつながっている人たちが、天を目指して歩むとき神の家族とならせていただくのです。教会に行き初めの頃、どうして週報に何とか姉・兄と書き、妹・弟と書かないのだろうかと不思議に思ったことがありました。後から分かったのですが、尊称の意味で使っているのだと思いました。皆さんが聞かれたら笑われますが。高校１年ごろのことです。それまでは教会に行ったことがなかったのでカルチャーショックを受けました。そういう人が神の家族の一員にならせていただいて、こうやって立たせていただいて不思議な神さまのみ業です。考えてみれば、わたしたちは皆、個性が違うし、育った環境も違うし、バラバラですよね、そのような私たちが日曜日に教会に集まって礼拝をしているのです。イエスさまが教会をこの世から選び取ってくださり、新しい契約を立てられているのです。そもそも万難を排して日曜日にここに集まること自体、不思議なことなのだと思います。パウロは大胆なことを宣言しています。「あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり」と言ってます。21 世紀に住む私たちでも驚きの発言ではないでしょうか。ここでいう、あなたがたとはこの手紙を読んでいるギリシャ人やユダヤ人や他の国の人たちでしょう。そういうあなたがたは、外国人でもなく、寄留者でもなく、寄留者とは一時的に身を寄せている人たちです。そのような人たちは聖なる民に属する者、神の家族だと言っています。これをもう少し説明を加えると、エフェソの町に国籍がある者は例えば、市民権が与えられていて一定の権利があるでしょう。けれど、寄留者は客人だから何の恩恵もないのです。けれどパウロは、たとえそういう人でも、主イエス・キリストを信じる人は霊的な意味にあって神の子であり、神の家族の一員であり聖徒なのだと励ましているのです。でも、そういうことを言われても、何の恩恵もなければつまらない、少しは税の優遇措置でもあればうれしいのだが、と内心寄留者は思うかもしれません。ところが、パウロは２０節でこう言います。「使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石は、キリスト・イエス御自身であり」、２１節「キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります」と言っているのです。そして「あなたがたは霊の働きによって神の住まいとなるのですよ」とパウロは励ましているのです。これは何を指しているのでしょうか。天における住まいに入れられる、と言っているのです。ここにパウロの復活信仰が表れているのです。御国に入れられることは何と素晴らしいことでしょう。少しの優遇措置よりも何倍もうれしいに違いありません。

あの時代、クリスチャンにはとても生きづらい時代でした。何しろローマのネロ皇帝の時代だったのです。伝説によると、ローマの古い街並みを自分好みの町に変えようとし、大火を起こし、それをクリスチャンのせいにしたと言われている人です。でもそういう目にあってもパウロを始め、どの使徒も皇帝の悪口を言わず黙々と耐え、主イエス・キリストを称えて証を立てたのでした。パウロはこう言っています。「何事も、不平や理屈を言わずに行い

なさい。そうすれば、とがめられるところのない清い者となり、よこしまな曲がった時代の中で、非の打ちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、命の言葉をしっかり保つでしょう」（フィリピ 2:14~16）と。私は子どもの頃から、星は見たことはなかったのです。見ても遠くに小さいのがぽつんと見えるだけでした。けれど小学生の頃、母の実家・宮城県ですが遊びに行った時驚きました。空を見上げると大きな星が近くでいっぱいキラキラ輝いているのです。手を出すと届きそうなくらいでした。パウロもそういう大きな星を見たに違いない。クリスチャンはこういう時代の只中にあっても、主イエス・キリストを信じて生活すれば、星のように輝いて御国に行けるでしょうと教えたのです。ですから私たちも、神の家族の一員にならせていただいて、これからも共に歩みましょう。